

〔愛宕編〕唐太宗時代の人、人相を見てその人の運命吉凶を判断する術に長じてゐた。萬姓統譜に、「愛宕編。成都人、有風鑑。應驗不可勝紀。太宗召見曰、古有君平、朕今得爾如何、對曰彼不達、時臣固勝之、子客師亦傳其術無不三奇中。」

えんとんしくわん 一心三觀の胸の月ば圓顔止觀のそらにかか

〔圓顔止觀〕一乗教の圓融無碍見在にして化益の顯速なるを圓顔といひ、妄念を靜止して眞智の通達を止觀といひ、天台の説くところである。

えんぶ 「えんぶ」を見よ。

えんえんごくごく えんえんごくごく 無相無念の上に於て、むぼうなしの大用を起し(大原問答)

〔圓四極極〕法身報身應身を具足して圓、大圓觀智・平等性智・妙觀察智・成所作智圓妙であつて、善根を極め涅槃を極めることをいふ。大原談義聞書鈔(延寶五年刊)に、「於三圓四極無相無念果成之上、起之無方難思之大用」。

を

を 昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け(會稽山)

〔尾〕峰通りから麓まで長く引きはへた處をいふ。古今集卷一、春上の部の歌に、「山櫻わが見にくれば春鮮にも尾にもたちかくしつづ」。太平記・千劍城の戦の條に、「谷を隔てをを隔てたる道なれば」。

えんとんしくわん — をこ

をかざきづきん エイソリヤひかれて來れば名も立たぬ、岡崎づきん羅綾の袂(三國志)

〔岡崎頭巾〕遊遊笑覽卷二上、服飾部に、「をかざき頭巾。丸頭巾に綴付たるを熊坂頭巾と云ふ、もしこれにや、短きも長きもあるべし、長きを熊坂頭巾といふ」。

をがせ 戀に心をひれり麻の、ながせ亂れた胸の中(丹波興作)

〔字樣字を捻り駁いだもの〕綾をかけて縁とし、これを袴履にかけて輪となせるもの。往時は字を續むを女藝の一に數へ、殊に下婢などは字を續むを内職としたのである。

をがみ はつる二十日の月毛の胸の、尾髪亂れて置く露に、袖の涙を打合せくどき焦れて泣く涙、馬の尾がみや浸すらん(大經師)

〔尾髪馬の尻尾。太平記卷十二公家一統政道の條に、「白瓦毛なる馬の、尾髪あくまで足つて太く速に」、沃懸地の敷置にて。〕

をかめ 甚によそへたる我身の上、包む心の奥の手はなかも見えて哀れなり(千疋犬)

〔岡目臈目即ち側から見る目をいふ。傍觀。和訓栞に「をかめ。陸目の義、海中の事か陸より觀て計るをいふ、旁觀の意也。甚哉を傍觀して居れば能く其得失がわかるを感に。岡目八目または臈目八目といふ。〕(序云、近世江戸の内で吉原以外の遊女屋のあつた場所を岡場所と稱した。この岡も臈の義で、吉原を本場所と云ふに對してこの稱も似た語であらう。をがらづきん 芋糟頭巾ひつたつて大斷臈指しこばらし(持統天皇)

〔芋糟頭巾〕甜菜の芋府を組んで作つた強盜頭巾。その條を見よ。芋原頭巾。物類稱呼卷四、衣笠部、頭巾の條に、「江戸にてからせしづきん、又がんだうづきんと云ふ北國にてぼうしと云ふ、又よくづきん、よくづきんと云ふ」。

をがんです 笑ひ顔見せて下んせながんます(夕霧)

〔拜みますの訛。〕

をきのやへぎり いせなの海人にあらねども、其はま萩野八重桐を龜井橋ちやおしやる、心ばの、さきはおたびの神かけて後先に又續く者がないは扱(今宮)

〔萩野八重桐〕寶永から正徳頃にかけて大阪で女形の名優である。役者謀火焚寶永七年刊大坂の巻、若女形の部に萩野八重桐とあつて其藝評が書いてある。堀山堤(根林字作、正徳二年七月竹本座)に、「私が昔はうき河竹の傾城萩野屋の八重桐と、太夫仲間を立てて者と言はれし程の全盛の」と見えて、萩野八重桐をなく萩野八重桐になつてゐる。今宮心中(竹本座上演)のこの文は、潰散の萩野をいひかけたのであるから、萩野八重桐でなければならぬ。按ずるに同時代に萩野八重桐とも萩野八重桐ともいふものである。今宮心中のこの文は、龜井橋を西に渡れば天神のお旅所であつて、お旅所に行くには龜井橋より外には後先に續く橋がないを、絶世の名優である意にひかけたのである。

をぐり この將監は禁中の繪所小栗と筆の争にて、勅諭の身となつたので(反魂香)

〔小栗將監元僧の初の師小栗宗丹を借りてかくいふたのであらう。宗丹名は助重、大徳寺に住し、筆を周文に學び、後に牧溪、正潤、夏莊、馬遠の畫風を追慕し、研究してその深趣を得、寛正五年正月六十七歳で歿した。をけがはどう 具足も拙者が細工(用明天皇)

〔桶則調具足の一稱。豐臣家譜に「尾張國所用法甲冑者何哉、對曰有三角丸者、其制異於桶皮筒也。於右脇結之屋伸自由也」と見え、また本朝軍器考頭書九下、今世に桶皮筒といふ鐵は、古の桶皮筒といふかな脚に草すりを附たる也」と見えてあるから、桶皮筒も書いて、金脚の左脇腰帯にて屈伸するやうに作つたものであらう。根林字のこの文は、久馬平が桶結びであるから、その鐵筒の桶側といふたのである。

をけと 言は、女に出家が濡れる事ぢや(壬生大念佛)

〔桶取〕壬生寺(寶幢寺)で毎年三月十四日から二十四日まで大念佛修行の間、狂言の儀あり、これを壬生狂言といひ、番組二十五番あつて、桶取はその一である。小唄打聞(寛政二年)等を集む、壬生狂言の歌、桶とりの歌にきざしめる水にもうつるおぼろ月、影はづかめたき心根を、しらす姿のナ踊りの手、ちぎりをかか桶とりよ。是は壬生狂言のうたとせん、寛政元年の春の頃京攝の間に専ら流行せしといふ、ふるき唱歌とは見え侍る。

をこ 御政道暗しとは天晴おのれは(この歌酒香童子) 大王の御敵日本武尊當國に忍びある由聞召され、さしも猛威の聞えある八十の梟帥を、女に形を扮し討取る程の

なこの者(日本武尊)

髪、愚(ばか)か。後漢の頃雨鬘に烏瀉といふ鳥があつて、その風俗に理非を顛倒して笑ふべきことが多かつたので、その語暗合し、後には混淆したのだといふ。日本武尊吾妻鑑の「こにへる」をこは非凡の意にいうたので、「をこ」を尾籠と書き、これを音讀して「ばろ」しよまふ。

***をこげ** 圓いをこげに角の蓋(大經師) 片手の袖の下をこげの懸子、底意には心をひねりその(丹波與作)

「麻小筒(續麻)(女用訓蒙圖書所載)を容れる筒のわけもの。昔は麻を織むを女織の一に歌へたれば、麻小筒がかかる所にも云はれたのである。圓い麻小筒に角の蓋は團圓方柄相容れざる意である。



***をさあ** 思筆を染め散しなさい

「をさな(幼)の子音の脱落した訛で「なんだを「あんだ」を「あ」といふ類である。義經記(寛永十二年刊)卷一、義朝都落の條に「成人の子どもを引具して、おさあいをば都にてぞ落ちしければ。巴木鼓淨瑠璃加賀捺正本第二に「聞きわけるなきをさあに而ひ、御身は信濃の國の住人木曾左馬頭義仲と朝日將軍の御子ぞを。」

をさめすざる 夜中にけはしい何の用でござると言へば、何の用とはなさまめ過ぎた(大經師)

「をさまりすぎる(治過)の意にさふ。落着き過ぎる。

***をし** 女房先立てながらへあらばそれや犬猫も同じ事、同じ中にも鹿となり鴛鴦と生れて女夫池(二枚柳)

「鴛鴦」鳥類の中でも鴛鴦は女夫最も醜じきものとされてゐる。遊仙窟の註に「惟豹古今注曰、鴛鴦水鳥類也。雌雄不暫相離人傳三其一則其一思而死、故謂之正鳥。陳云、鴛鴦者不相離之鳥、雄曰鴛、雌曰鴦。」

をしやんな 誰に習うてはてな歌、姫様などになしやんな必ずおいてもらばう(丹波與作)

「教へやるな」の訛。

をたけび だまき 女姿と三輪の神、そのなだまきを繰返し(三世相)

「聖徳」續麻を中空に外圍り巻いたもの。「女なすた。三輪の神」を見よ。

をたやむ 五月雨の一しきりをだやみて、空さりげなく舞々と、北斗の光鮮かに晴れ渡れば(倉橋出)

「をやむ(小止)にだ」の増加した訛語であつた。「あめ牛」を「あめだ牛」その條を見よと「ふ」の類である。止む。「この文に」をだやみとした本もあれど、「をだやみ」が正しい。武家雜語物語卷六、表面は夫婦の雨の條に「神鳴も落し方しれすやま、雨をだやみて。」五月雨の一しきり云々を見よ。

をだれ だれより道うつて拔討に「丁斬」屋根崩(堀川波)

「尾垂」屋根崩である。現今も關西地方で一般に用ひてゐる。梟林子のこの文意は、屋根崩から二階に道うつたのである。

***をづつ** 虎…四足を縮め怖れ戦き岩洞に隠れ入る、尾筒を掴んで跳返(國性巻) 尾筒を取つて引戻し(百日我)

「尾筒」尾の根が筒の様に固く腫れた處の稱。
***まこと** たまたま持つたる子供さへ「香花」とるべき者もなく、おことなをここにしたるさへ如何ばかり悔しきに(大猿虎)

「男」元服する(こを男)になるといふ。

をどもり 「おどもり」を見よ。

をどる 我等が僅の箇の元手も利食の月をどる、泥齋汁のしゆらい代とりきる間(こ)までも(二枚柳)

借錢の利を一月に二月をどる松坂越えて(丹波與作)

「跳」三倍の利息を取られるをいふ。一月に二月をどるは、一月に二月分の利を取られるをいふ。二月に一度つづをどるは、二月毎に三月分の利を取られるをいふ。世間娘歌(享保元年刊)卷一、百の纏よみかめる歌すきの娘の條に「元此銀は百五十匁にて、四割半の利息を五節句に一度つづをどり、七年二のかたになつたと申され。心中二枚柳草紙のここの文の「をどる」は、泥齋汁を踊す汁といひつづけたのである。狂歌浪速の條に「酒に田樂、串着すつばんの吸物成は踊子汁うまにも食ひ。丹波與作のここの文は、伊勢音頭の踊頭の「松坂越え」の文句を「をどる」の縁よりいひつづけたのである。

***をなみ** 波の雄波をかきわ

け(藤原歌)

「雄波」めなみ(雄波の對、波濤の高くなれる方を雄波といひ、低くばるる方を女波といふ)。

をばなうつば 明暮殺生を樂しみ、尾花鞍に弓取添へ今日も狩場へ出でにける(鶴丸)

「尾花」鞍形形の鞍はその形尾花に似たればいふ。

まひのとの やい女房ども、甥ののにか、つてこの甚五郎が身代破滅(女腹切) やい甥のとの姉者人、最前に来て内證言ふは一門だけの愚辰分、最早手詰になつて来た(待純天皇)

「甥」殿に殿を附けて甥の殿と敬つて呼ぶは輕蔑を意味し、甥の奴といふべきを反語的にいふ調。

***をみごろも** 邪神を祈る小忌衣(賀古教信)

「をみごろも(小忌衣)の略。大嘗會(新嘗會)などに行ふ禊祓、小忌の際に着る衣である。祭事の際に裝束又は袍の上に着る。白布青絹で形符衣に似、右肩に二筋の赤の打紐を附け、兩袖の中央に紙條を垂れる。紋様は青團扇を春草又は小鳥を山籠ると描り、祭官樂人などの着る服である。

をみなめし 忽に柑子は蒸せる粟の餅、鼠も所の男山をみなめしとぞなりにける(弘徽殿)

「御祭儀に女郎をいひかけたのである。鼠も所の男山云々」を見よ。

***をみのそて** 神樂乙女のをみの袖、白木綿かけし唐櫃に(日本武尊)

「小忌袖」小忌衣の袖の略。「をみてろも」を見よ。

をらん 忍ぶ戀路をせきだいの、女
蘭蘭蘭は呂州の姿(生玉)

〔男蘭〕漢名建蘭といひ、蘭の一種。飯沼長順撰「草木圖説」前篇卷十八に「ヨラン(建蘭)」。此品幽姿清麗柔草に卓絶し、眞に益理の最上他に比すべきなし。飯沼長順のこの評は以て呂州の姿に當て、更に湯女であつたまがに思ひ及ぼすとき、この文その意深長で感深きを覺える。「戀路をせきだいの」は、戀路を塞ぎに石壁をいひかけたのである。「せきだいの」(石壁)はその條に述べたれど、花壇地錦抄(元祿八年刊)草木植作様之卷、蘭の條に「先持様はせきだいの又は鉢に植る」と見え、養生花林抄(享保十八年刊)巻五、さし木の條に、挿木用の長方形木製箱の圖を載せて、「せきだいの器物をも稱したものである。按じて石壁は盆石を載せる臺の義であらう。轉じて植木鉢・植木箱をいふ。」

をり 左五郎をりを昇かせ登山
し(三國志)

〔折〕折詰の略。饗應の飲食物を容れた折詰。
をりかけがき
〔折掛垣〕竹などを折曲げて作れる垣。見よと
いふ人こそうけれ云云)を見よ。

をりがみ、この差料五千兩の折紙
あれば(加増曾我) 代物間へば三百
貫の折紙(女腹切) 刀屋石見何某と
て諸役御免の受領職、折紙太刀の
御用まで(女腹切)

〔折紙〕黄金五枚以上の價值ある刀劍鑑定の證書で、腰に折つてあるによつて折紙といふ。現存せる折紙の最古ものは豊臣時代の木阿彌の折紙である。折紙の紙質は光道(本阿彌彌)の折紙(本阿彌)の紙質は光道(十一代)

時代までは區區で定まつてゐない。光常(十六代)になつて厚い奉書の折紙を用ゐるやうに定まつた。折紙の摺方に就いては若し正宗作の刀なる時は、正宗正直長き何尺寸何分磨上銘表裏有之代金子何百枚拾枚」とありて、末の方に年月日を記し、其下に「本阿」の二字の花押をなし、其花押の裏の方に豊木間から拜領した(本阿)の形の銅印を黒肉で捺してある。雍州府志(貞享三)七土庫門下(服部郡)に、「相傳足利輝氏卿之時相州鎌倉有之妙本阿彌者、專相刀劍之新舊眞贋并事松原彌、輝氏卿入洛日從後來遂任京師、元松田氏也、然始本阿彌流一人以本阿彌爲稱號、……凡揮刀刃之新舊眞贋、則流本阿彌某宅聚二族相共辨理之、定其眞贋并誰無治工之名、則揮其所作之巧、謂之誰誰某之所作也、倭俗是謂自利、於茲本家嫡流一人出折紙、其法白紙摺折之、其中夾書銀工誰某作而價幾何也、其終粘印、凡價黄金五枚以上稱折紙、自黄金一枚至四枚、謂之何也。」

をりは 曇くろしとして駕籠をばや、
なりばの乞日さぶ六の十八九なる
かほよ花(曾根崎)

〔折羽〕雙六の類、十二箇つづの駒を用ひ、二箇の采を竹筒に入れて振つて出たる采の目ほどの駒を取合ひ、駒が盤面に無くなつた時その駒を計算して、駒を多く取つた者を勝とする。擲遊笑覽(卷四)に、「今をりはといへるものは、擲遊集に雙六下胎重戦、又尺素往來に園基將基下胎、この下胎といへるものなるべし」と見えてある。「こひめは、雙六にてこの目出でよとの乞日を頼むをいひかけて、雙六の目數三・六に年齢十八をいひかけて文節としたのである。」

をりはふ 交野の御野の櫻狩、今日

の紅葉ををりはへて月卿雲客供奉
せしめ(舞丸) 花にをりはへ行く雁
も、此處の景色を忘れかた田にお
ちか(へり(槍狩))

折延の義。時の引續くをいふ。古今集・夏の部の歌に「あしびきの山時鳥をりはへて、たれかまきると音をのみぞ鳴く」。但し櫻林子は「ふりはへ」ををりはへに誤つたのであらう。「ふりはへ」はわざわざ、または殊更の意にいふ。

をりめ 卷舌の諸禮、折目正しき正
月言葉(毒女)

〔折目物〕折つたきをいひ、轉じて言語動作、行儀作法。
をりみのどう 我らがこの鼓を調べ
れば、ぼとぼとと桶の底叩く様な
り(酒吞童子)

〔折居胸〕鼓作りの名工折居作の胸。雍州府志・土庫門下・服部郡に、「大小鼓筒多以櫻木一造之、……、古於和州多武峯二有造之者、則稱談峯、又折居者稱傑作也、爾後代々以折居稱之、其祖先所造謂古折居、又一代巧手、老後爲譽、此人所作謂首折居近世獨筒筒是又爲良、鼓筒の名工折居の系統などは鼓筒之鑑定(大正六年刊)に詳説してある。

をんあぶらとりり
「おんあぶらとりり」を見よ。
をんぞろ 「おんぞろ」を見よ。
をんでもない 「おんでもない」を見よ。
をんと 亭主に連れて立廻る、女郎
も田舎ばをんとなり(博多)

「をんたう」(穩當)の約語。人の性の温順なるをいふ。律義一遍。役者色系圖(正徳四年刊)

大坂之巻 男色と女色と兩者の評判の條に、
「愚賢な大番を廻するの自由なるより一座も
扶がものとなれば」とあつて、愚賢に「おん
と」と傍訓してある。

をんをのり云々
「おんをのり云々」を見よ。

(終)

をらん——をんをのり云々

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん

をらん